

大平総理の思い出

西山 磐

昭和五十四年十二月十九日、私は官邸に大平総理を訪ね、いわゆる自民党四十日抗争の直後でもありましたので、ご慰勞の言葉を申し上げますと、総理はしんみりと、「僕はいままで随分人のために働いてきたつもりなのに、まだ神様に叱られるとは前世が悪かったのだなあ」と笑っておられました。心なしか淋しそうでありました。それが、大平先生に個人的にお目にかかった最後でした。

東銀座七丁目に「栄家」という旅館がありました。女将は和田栄子といって誠に折り目けじめの正しい老婦人でありましたので、私どもは古くから気軽に利用しておりました。その和田女史が池田さん以來、大平先生の非常なファンで政財界にもこひひきが多く、先生もまた心おきなく使っておられたようでした。

待ちこがれていた先生の総理就任を見ぬまま、五年前逝ってしまったことは誠に心残りと思えますが、その女将がいつの頃でしたか時代は忘れましたが、「先生はこの頃暇らしいから麻雀でもして慰めてあげなさいよ」とのこと、約束の時間につかがいまずと、先生は一足先にお見えになっていて、玄関脇の小さな部屋で腕組みをしながらプロ野球のテレビをご覧になっておられました。先生も巨人ファンですかと尋ねますと、いや巨人が敗けるのを待っているんだ、とのことでした。

麻雀は大変楽しそうで、牌をめくるのにいちいち親指に唾をつけて、ヤイとかコレとかいいながら大きな上がりばかりを狙うので、つい私も引き込まれて大変楽しい一タをおくったことがあります。

大平先生はまたゴルフもお好きでした。栄家の女将から何月何日に先生が大阪に行くから一日ゴルフのお相手をとということで、茨木コースで二回ばかりお供をしましたが、ロングアイアンを巧みに使いこなされて負かされたことを覚えていません。また関西電力の芦原会長の主催で大平会のコンペが西宮コースで開催されました際、幸運にも私が優勝いたしましたして、大平先生にご寄贈の銀盃をいただきました。「一九七一年九月大平正芳寄贈」と刻まれた見事なカップが、今私の部屋に飾っております。「朝花夕月随時楽」と書かれた先生ご揮毫の色紙と共に。

昭和五十五年六月十二日、青天の霹靂ともいうべき大平総理の急逝は痛根の極みでありました。

大平総理は極めて短い在任期間ながら東京サミットを主宰され、あるいは世界各国を駆け巡られ、自らの信念と発想を自らの言葉で語られ、各国の首脳から厚い信頼と友情を得られましたことは、私ども日本国民にとりまして大きな誇りであります。

また総理は就任早々の国会で「経済にアクセントを置いた時代から文化の時代へ」と透徹した時代認識を述べられ、「家庭基盤の充実」、「田園都市構想の上に立った文化の時代の構想」等々深い哲理に裏付けされた一連の構想は、歴代の宰相とは一味違う表現で、政策の原点を述べられたものと思いますが、今や時代の潮流、国民のニーズが、物より心へと移っておりますだけに、あの卓越した政治哲学が実践に移され結果するいとまもなかったことは、かえすがえすも残念と申さなければなりません。

(大阪瓦斯会長)